

遊ぶ Vygotsky at Work and Play

ヴィゴツキー

生成の心理学へ



ロイス・ホルツマン
茂呂雄二 訳

世界中の子どもたち、若者、
そして企業人が取り組み始めた！



今の自分を超えて、
ヴィゴツキーの「頭一つの背伸び」をもたらす、
協働で遊ぶ＝プレイする＝パフォーマンスすることの力。
新しい、「発達する」環境を生み出す
生成の心理学への招待。

遊ぶヴィゴツキー

生成の心理学へ

ロイス・ホルツマン

茂呂雄二 訳

新曜社

Lois Holzman

VYGOTSKY AT WORK AND PLAY

Copyright © 2009 Psychology Press. All rights reserved.
Authorised translation from English language edition published
by Routledge, a member of the Taylor & Francis Group.
Japanese translation published by arrangement with Taylor & Francis Group
through The English Agency (Japan) Ltd.

革命的心理学を研究し、そして革命的心理学と遊んだ、
ジョヴァン・サヴィツチ（1937～2006）に捧げる。

「研究のためにその対象を静止させてはならない」

(フレド・ニューマン原作の芝居 *Life Upon the Wicked Stage* の登場人物、

レフ・ヴィゴツキーの台詞より)

日本語版に寄せて

私がこの本を書き上げたのは、茂呂雄二教授と会う前の2008年の年末だった。それ以来、ヴィゴツキーは、本書で紹介している米国のコミュニティ場面はもとより、世界中のたくさんの方々のコミュニティで「遊びそして学び」続けられている。茂呂教授の努力で、本書で紹介しているヴィゴツキーに鼓舞された人間とコミュニティの発達方法論を、日本の読者にも知っていただくことができるようになった。このことに、ここからお礼を述べたい。また、時間を割いてニューヨークに足を運ぶ、「道具と結果の弁証法」という私とフレド、そして仲間たちがヴィゴツキーの人生と著作に見出した建築素材を使って何を作り上げたのか、彼自身の目で見にきてくれたことにも感謝したい。

ヴィゴツキーの創造的課題は、方法の探求にあったと彼自身が語っている。「探求の方法は、人間独自の心理活動の形態を研究するという企図にとつて、最大限に重要な問題となる。この場合、方法論は、前提であると同時に産出物でもある。つまり研究の、道具であると同時に結果そのものなのだ」(Vygotsky, 1978, p.65)。

およそ百年前、心理学は自然科学や物理学の、道具主義的な、結果のための道具方法論を見習う道

を選んだ。哲学者のフレド・ニューマンと発達心理学者の私は、二人ともコミュニテイの組織者であり社会活動家でもあるが、人間の研究に不向きなこの方法を拒否した（人間は天体や植物や身体器官とは質的に異なるのであるから）。私たちはヴィゴツキーの道具と結果の弁証法に強く触発された。私たちの仲間が米国で行なっていた実践にびったりであるだけでなく、私たちに、人間の生の弁証法的な本性を明確に描き出し、そして、人間の生を理解するよう励ますものであった。

私たちは自分たちのやり方で、ヴィゴツキーの方法論についての記述を解釈した。人間は道具を作り利用するだけではなく、新しい種類の道具——道具と結果の道具をも作り出すと考えた。そればかりでなく、人間の発達も道具と結果の方法論に従う。ヴィゴツキーは大人との言語ゲームとごっこ遊びによって、乳幼児が言葉の話し手となることを示した。この2つの活動においては、道具（プロセス）と結果（プロダクト）が同時に出現する。

ヴィゴツキーは次のように述べている。「遊びのなかでは、子どもは頭一つ抜け出たもののように行為する。遊びは発達における先導要因である」（Vygotsky, 1978, p.102）。彼は、遊びの中で、私たちはいまある私たちであるだけでなく、同時に、何者かに成ろうとすると言っている。大人や周囲の年長者と遊ぶことで、学習のパフォーマンスを創造しながら、乳幼児は学習すると指摘している。数百人も私たちの仲間が、セラピー、教育、若者の組織作り、演劇作り、独立系の政治運動で、さまざまな組織作りの仕事をするのを見てきて分かったことがある。それは発達するのは子どもだけではないということだ。「頭一つ抜け出た人」、つまり自分が成ろうとしている人とかかわるとき、すべて

の年齢の、あらゆる人が発達できるのである。赤ちゃんがまだ正しく話す以前から、母親と一緒に会話をパフォーマンスするように、学齢期の子どもたちも知識も無いのに読み書きや算数や科学をパフォーマンスできるし、大人もパフォーマンスの力で、自分の世界をまわしていくしかたを学べるのである。

喃語を話す赤ちゃん、舞台の上の俳優、学校で劇をする生徒、データを高らかに唱える研究者、そしてすべての人々が、そうしようと思えば支援を受けられるなら、新しいパフォーマンスを創造し続けることができる。これが、私の考える発達のプロセスである。つまり人々は社会文化的活動を通して、協働して、世界の中での人々のあり方とつながり方、世界の理解と変化について、新しい可能性と新しい選択肢を創造するのだ。言うまでもなく、世界の中には私たち自身も含まれている。

本書は、現在の自分よりも「頭一つ抜け出た人」として互いにつながることに書いて書いている。数千の都市貧困層の子どもと若者、感情の苦痛を感じている人々、善き親・善き教師・善きカウンセラーに成るため学びたいと思っている人々、コミュニティを築きたいと思っている人々とともに成長のための環境を作るとはどのようなことなのか、紹介したいと思った。私たちはみな、子どものように遊び、どうやればよいか知らないことを行ない、自分で存り、かつ同時に自分ではない人物に成る、そういう能力を持っている。これこそが革命的な遊びなのである。パフォーマンスなのである。人間の発達なのである。これが私たちの、ヴィゴツキーに命を吹き込まれた、生成の心理学のエッセンスなのである。

この遊びに満ちた、世界に他者と共に存る革命的なあり方は、年齢にかかわらず、私たちすべてがモデルにすることができる。しかし大方の人は、そうであることを止めてしまう。私たちは、仕事と遊びは違うと教えられる。重要なのは仕事だと。学習と遊びは違うとも教えられる。重要なのは学習だと。私たちは絶えず、自分がどんな存在であり、成ることのできる限界があると告げられる。私たちは正しく振るまい、良く見えることに集中する。こうして発達が止められてしまうのだ。革命的遊びなしには、それ以上進めなくなってしまう。個人も、家族もだ。そしてコミュニティも、もう発達しない。実際、この世界は古い役割、化石のようなパフォーマンス、破壊的なゲームに立ち往生しているように見える。

ヴィゴツキーの洞察と私や他の人々の研究から、人々が苦境から逃れるには、今の自分たちのままではなく、自分を超えて成りつつある存在として人々と繋がることのできる、革命的遊びが可能な環境を創造することが必要だと学んだ。貧困、トラウマ、いじめ、身体的な限界、他のあらゆる理由で人々が立ち往生してしまったとき、このような遊びは成長をやめたしまった人々に学習と発達を再開させることができるのである。赤ちゃんと養育者がするやり方で遊ぶことで、学習への愛を取り戻し、他者との新しいつながり方を創造し、希望を生み出し、生を充実させ、新しい経験に取り組み、自身の、そして家族やコミュニティの生を積極的に創造することが可能となる。

世界中で、人々は遊び、プレイしている。彼らは何者かに成るための、発達のための、転換のための、環境を創造している。その環境は、やり方を知らないことを行ない、協働で新しいことを創造す

るのを支える環境である。まさにそのような活動をしている日本の研究者と学生の皆さんに会うことができたのは光栄なことだった。彼らはみな、ヴィゴツキーにならって、持続的な人間とコミュニケーションの発達のための新しい心理学を創造するには、「方法の探求」（既存の方法の適用ではなく）が必要だと信じている。日本語版の出版が、多くの学生、研究者、教育者、ソーシャルワーカー、心理学者、コミュニティ活動家や他の人々が、ヴィゴツキーとともに、そして米国の私たちがしてきた仕事とともに、学び遊び、そして、何か新しいものを創造する一助となることを期待している。

2014年6月19日

ロイス・ホルツマン

本書への序

「なんでコンピュータを持って行かなかつたんだろう。」意気消沈しながら自問する。eメールは、今や見るのも嫌なくらいの山になっている。学術雑誌に約束した原稿は書きかけだし、すぐに返事を迫られている留守電もいくつか残されている。いちばん大変なのは、明日の授業の準備が終わっていないことだ。このような状況は私だけではない。学者の友人のほとんどにとつて、これはごく普通の生活だ。私たちは、上り坂のマラソンレースでいつも後れをとっているようなものだ。後ろを振り向く余裕もなく、今日までの来し方や、うまくいつているかどうかを振り返り、得られたさまざまな学びの成果を確認する暇もない。情けないことである。

こんな状況にあったとき、ロイス・ホルツマンから『学ぶヴィゴツキー』の草稿が送られてきた。ここでは、飛び抜けてアクティブな研究者であると同時に実践家でもある著者が、自分の過去の活動を振り返っているのではないか。これは私たちすべてへの招待状であると言うしかない。本書で、ホルツマンは何十年にもわたる、セラピー場面、学校、放課後プログラム、若者のパフォーマンス・プログラム、企業、その他さまざまな場で行なってきた数多くの、献身的な努力のあとを振り返っている。

ホルツマンは、そうした場での実践と、その潜在的だが同時に普遍的な価値、長い時間をかけた理論的見解の発展が互いに影響しあいながらつくり上げてきた、彼女の奮闘努力の道筋をつまびらかにしている。多くの点で本書におけるホルツマンの関心は人間の発達にあり、議論の展開に沿って、そのような発達がまさに起こっていることが見事に示されている。

本書の魅力は、何ととっても、彼女のグループが行なってきた多様な試みを理論的につなげるそのしかたであり、理論が実践とともに発展してきた道筋を明らかにしていることである。数年来、社会科学における理論の位置が著しく浸食されてきたことを考えれば、この理論と実践の協働が本書のもっとも重要な側面である。この浸食をもたらしたのはまずもって、実証主義と経験主義の拡大である。経験主義に基づく研究が、ますます研究者にとって重要なものとなった。プロの心理学者の成功は公刊論文の数しだいとなり、理論的、メタ理論的議論は、瀕死の状態に追いやられた。加えてポストモダン転回も理論を批判したが、それは、理論とは真実の担い手であるという従来の方え方に対するものであった。こうして理論はふたたびやり玉にあげられたのである。しかしホルツマンは本書で、実践を牽引する上で理論が果たす役割を見事に示している。理論が対話に取り込まれると、いかに独創的展開が興るかを明らかにしている。そしてもっとも重要なのは、多様な活動が、いかにして彼女の創始した理論的な見解を広げ豊かにしたかが、私たちにわかるようにしてくれていることだ。いまや読者である私たちは、理論の海へと泳ぎだし、自分自身の関心を追求するよう誘われている。

私自身、理論とその実践への適用が展開するのを目の当たりにして、本当に興奮している。彼女の

仕事の基礎には、ヴィゴツキーの著作の啓発がある。ヴィゴツキーの著作は、認知が自己充足的で生物学的に決定されているとする、主流の認知心理学への根本的な批判であるとみなされてきた。ヴィゴツキーにとって、思考は基本的に社会文化的文脈に依存している。したがって、社会的行為は、人間のコントロールを超えた認知メカニズムによって決定されるのではない。むしろ、ヴィゴツキー、そして彼と考えを同じくする一連の研究者たちにとって、社会の転換は、批判的分析と協働の活動によって達成されるのである。ホルツマンは、学びと遊びにおけるヴィゴツキーを見事に描き出したが、とりわけ私がすばらしいと思うのは、ホルツマンがヴィゴツキーに見出した方向性である。多くの心理学者が、ヴィゴツキーの理論を個人の枠組みで理解した。つまり、「高次精神機能」に焦点をあてたヴィゴツキーの文章に共鳴したのであった。そのため、社会的世界は考慮されるが、精神生活を左右する単なる要因に成り下がる。社会的世界自体には、特段の関心をもたないのである。ホルツマンは力点を逆転させて、重要な結論にいたった。個人の行為がそもそも社会的な源をもつなら、転換は社会的プロセスを通してしか生じない。そして、この転換こそが、人間発達そのものなのである。

こうしてホルツマンは、たとえば発達の最近接領域の個人主義的、認知的見方に満足しない。発達の最近接領域を、既存の認知機能によって個人が達成するであろうことと、他者の支援によって達成されるであろうことの差異であるとする見方である。それどころかホルツマンは、情動発達のゾーン概念を提唱し、他者と機能的な関係を構築しながら協働するなかで情動が発達することを強調する。強調は協働のプロセスにあり、個人の発達はそのなかでもたらされるといふことだ。

ホルツマンが示しているように、認知から情動へと強調点を移すことは、実践にとって重要な意味をもつ。情動を含めることで、ヴィゴツキーがセラピー、教育、そして日常生活における新しい重要な実践とかみ合せて動き出すのである。さらにホルツマンの立ち位置からヴィゴツキーの仕事の社会的意味に目を向けることによって、社会生活における遊び／演劇の役割にまったく新しい照明を当てることができる。遊び／演劇によって「今ある状態」への挑戦が可能となり、協働で遊び／演じることで、発達が加速される。こうして、アートの全域が人間の発達に重大な意味を担うようになり、学校や組織にとっても重要な意義を持つこととなる。

最後に、ホルツマンは、個人主義中心の伝統全体に疑問を投げかけている。関係から分断された個人が空虚であることを正しく喝破している。そして、ホルツマンの旅が自身の研究にとっても特に刺激的だと思うのは、この視点の転換なのである。いま、私が十数年来あたためてきた作品が完成に近づいている。『関係する存在——個人とコミュニティを超えて』は、ホルツマンの刺激的な本と結ぶ関係の軌跡を描こうとしている。とてもありがたいことである。

ケン・ガーゲン

スワースモア大学、アメリカ合衆国

まなびがき

レフ・ヴィゴツキーに出会ったのは、発達心理学者、発達心理言語学者としてやっていこうという時だった。私は政治的にラディカルになって、ヴィゴツキーを私の政治面でのメンターである哲学者に紹介した。彼と仕事を始めるため私は大学を離れ、ヴィゴツキーを携えて、主流の学者の世界から飛び出した。

私のはじめてのメンターは、ロイス・ブルームだった。研究者であり教育者であるロイスとは1970年代に、院生としてコロンビア大学の発達心理学大学院プログラムで一緒に仕事をした。幼児の言語学習を研究するには、大学のラボを離れて、家庭や遊び集団に入っていかなければならないことをロイスは教えてくれた。私たちは、遊び、会話し、パフォーマンスしながら、赤ちゃんたちと何時間も一緒にいたものだ。私は、文脈がとても大事であること、赤ちゃんが家庭で行なうのと同じことをラボでもするわけでないこと、赤ちゃんと、何をするか、誰と一緒にやるのかとは一体のものであることを学んだ。ロイスと仕事をする一方で、質的研究が量的研究よりも厳密である——実際、数段厳密である——ことを学んだ。ロイスのおかげで、私は研究というものが大好きになった。彼女

が私をラボから連れ出してきて以来、それは私のすべての研究の基礎となった。

二番目のメンターは、1970年代後半ロックフェラー大学でポストドク研究員として一緒に仕事をした、マイケル・コールだった。マイクは、実験室では認知の社会文化的な性質を見ることはできないため、ラボでの認知研究は生態学的に妥当とはなり得ないことを教えてくれた。彼は科学一般、とくに社会科学や心理学は、政治的であること、そして心理学者の仕事は実践として意味のあるものになりうることを、はじめて私に自覚させてくれた。そのうえマイクは、きわめて実践的であり、きわめて政治的な社会学者、レフ・ヴィゴツキーのことを教えてくれた。この2つの教え——ヴィゴツキーと心理学の政治性——が、三番目のメンターであるフレド・ニューマンとの出会いの舞台となった。

フレドと出会ったのは、博士論文が完成に近づきつつあった、コールと仕事を始めた頃だった。フレドは哲学者だったが、政治的組織作りとコミュニティ作りのため、1960年代後半に大学を去った。彼は科学哲学とマルクス主義を背景に、ソーシャルセラピーというラディカルな心理療法を創始していた。フレドは、何十年にもわたる共同研究を通して、さまざまなことを教えてくれた。一つは、世界に出て行く道筋を示してくれたことである。ロイス・ブルームもマイク・コールも、ラボから出て行くことは教えてくれた。しかし、大学のラボのかわりに家庭の居間や遊び場に座っている、私たちは大学ラボの実験的な考え方や方法をそこに持ち込んでいたのだ。フレドはラボとは関係のない生を歩む道筋を示してくれた。フレドは、アクティブに世界の変革を試みることで、世界を研究する

方法の開拓という仕事に誘ってくれた。フレドとともに実践することで、私の人間発達に関する情熱が決して知的好奇心だけからくるものではなく、人間という種が生存し繁栄するためには発達の道筋を見出さなければならぬという信念と、この革命的な活動に貢献したいという欲望にも由来すると分かったのだった。

フレドをメンターにして、30年以上一緒に仕事をしてきたわけだが、私の活動が変わったのはもちろん、私という人間も変わった。いま私は、研究する対象の建設者であり共同の創造者であるという意味でよい科学者になれていると感じるし、ラボと無縁になってよい研究者になれたと感じる。こうは言っても、始めの二人のメンターの教えと贈り物を否定するものではない。学習と発達が社会文化的な状況に埋め込まれていること、心理学が生態学的に妥当でなければならぬこと、心理学のもつ政治性、レフ・ヴィゴツキーの現代的意義、これらのブルームとコールの教えは、大学の外へ持ち出して、日常生活者の生へと持ち込むことで深まり、さらに発展した。それらはフレドと私と数百の人々が取り組む活動の一部となった。ヴィゴツキーをフレドのところを持ち込んで、フレドの革命的で哲学的な目でヴィゴツキーを吟味するようにしむけたのは私である。本書の事例に明らかのように、生きたヴィゴツキー主義の発展に私や仲間を取り組ませたのは、まさにフレドだった。

私はむかし、レフ・ヴィゴツキーを誰もが使う言葉にしたいという夢を綴ったことがある。私は実験学校のバーバラ・テイラースクール（3章）について書き、ヴィゴツキーをハーレムの子どもたちや家族に届けて彼らの発達を再活性化し、学校での学びをもっと先鋭なものにしたかった。私の書い